これからの時代、世界的に重要となる自然崇拝と祖先崇拝について①

㈱人間と科学の研究所 所長
飛岡 健

〈はじめに〉
動物にも意識はあると言うが

昨今、私の意識の中に常に、神道の中核をなす自然崇拝と祖先崇拝の２つの人間の意識の流れに関しての関心が宿り続けていると共に強まっている。何故ならば、現代社会において、その２つが人間の心や精神や魂にとって極めて重要であるが、それが次第に薄まり消えて行く様相を示しているからである。

そして折に触れ、その事が私の脳の中で蠢くのである。そこで少し腰を据えて、この２つの意識について考えてみようと思った。それはこれからの時代、世界的にこの２つの考え方が増々重要となっていくからである。同時にその起源に関してかなりの不明点が存在しているからである。それを少し根源的に考えてみたい。まず考えの端緒として生命体の意識の話しである。

人間が意識を宿しているのは、主としてホモサピエンスとして言葉を操る能力（Ｌｏｇｏｓ）を獲得した事が大きい。しかし意識と言うのは、最近の学説では、動物にも、植物にも、原初的形態として存在すると言われ始めている。更にひとつひとつの細胞にも意識が原初的にあるという。とすると意識というのは、どのように定義すれば良いのか？

例えば、犬や猫が飼い主の意向を受けて、それに対して何らかの対応行動をするとか、動物の飼育の時にクラシック音楽を流すと良く成長したり、乳の出が良くなったりすると

いう報告もある。

あるいはサボテンの木を切ろうとすると、刃物を持った人間が近づくと、サボテンの葉脈電流が乱れるとか、逆に野菜の栽培時に音楽を流すと育ちが良いといった報告もある。

そうした話をいろいろと聞くと、動植物にも何らかの意識があると考える事が必要と思うが、その場合の意識とは何なのであろうか？どのように定義する事が出来るのであろうか？一般的に言えば、動物の人間に対しての意識は、パブロフの反射実験の如く、餌付けによるものと考えるのが考え易いが、動物の中にそうではなくて、他律的なものでなく、自律的な意識の発生は無いのであろうか？何かありそうな気もするのである。

刃物を持った人間が近づくと葉脈電流が乱れる？

サボテンが感じているのは、まだ人間が刃物をサボテンにあてる前なので、人間的に言えば〝殺気〟という「気」を感じている訳である。ひょっとすると金属に対しての本能的な電磁気的な反応かも知れないし、もう少し人間に近く刃物を持った人間の意識を、サボテンが人間のように理解して反応するという事なのか、今のところ、私の知識では、それを答える事は出来ない。動植物の意識と人間の意識の間に、どういう差や違いがあるのか？そもそも辿れば、人間も他の動植物も、同じ細胞から出来上がっている。その細胞は磁気を感じる能力があるし、時間を認知する能力もあるのだ。そして電気的には電池とも言えるのである。少なくとも物理的には、これら生命体は同じ原理で細胞レベルにおいて動いているのである。

仮に細胞レベルに意識の発生源があるならば、人間以外の他の動植物においても、根源的な意識のメカニズムが存在していてもおかしくない事になる。

だが意識が細胞の集合体としての組織（Ｔｉｓｓｕｅ）や器官（Ｏｒｇａｎｓ）に発生源があるとすると、人間と他の動植物との間には、何らかの遺伝学上や、進化論上の区別や差異が出てくる可能性がある。

いずれにしても、今のところ詳しい事は判らないが、次の事は言えるであろう。動植物も自分の生存に対して、プラス、マイナスになるものに、何らかの形で反応し（環境への適応＝ａｃｃｌｉｍａｔｉｚａｔｉｏｎ）、その生存の可能性を高めていると。それ故、自らの生命を脅かす事象には、何らかの積極的な反応をする事が出来ると推測しても良いであろう。

そして動植物を作り上げている物質は全て、物質の二重性（Ｄｕａｌｉｔｙ）を持ち、粒子的性質と波動的性質とを併せ持っていて、その波動は空間を伝幡するので、必ず他へその大きさは別として何らかの影響を及ぼしている。また粒子もその質量を通して、重力による影響を他へ及ぼしている。それ故、全ての物質はこの宇宙空間において何らかの形で、自己の存在が他へ影響を及ぼしている事になる。まさに仏教的に言えば「一念三千」であり、全てのものが全てのものと繋がっているという事である。

そうした物質の粒子と波動としての性質が、他とのコミュニケーションを可能にしていたとして、実際に動植物は、どのように成長を促す要因と成長を阻害する要因を区別して感じているのだろう。あるいは判断するのか、その科学的メカニズムが明確な科学として判らないのである。いや私が知らないだけなのかも知れない。

実は私は、人間以外の動植物に意識があるかないかを議論したいと考えたのは「動植物共に、その祖先に対して何らかの意識を持っているかどうか」を知りたかったからである。何故なら、我々の祖先は類人猿であり、その前は、猿類なのである。そして、生命系統樹を根本に戻って行なった時に、何処で意識が意識として顕在化してくるのか、それを正しく知りたいのである。それを考える上で、自然に関しては動植物のみな

らず、全ての生命体が極めて敏感であり、日々環境のもたらす影響を鋭く察知して、その生存を図っている訳である。例えば、1つの例として、ササネズミというネズミを見てみよう。そのネズミは、笹を食料として生きているが、その竹の年間の繁殖量に応じて、その年の生殖量を春に決めているという。

その事は、明らかにササネズミは、未来予測をして、自分達の生存を画している訳である。そのように空間環境に存在する物質と時間を入れてのコミュニケーションを自然の動きに合わせて取っている。その事は何らかの形で、未来に対しての判断力が本能的であれ、学習的であれ備わっている事を物語っている。その判断力は何処からくるのであろうか？ホルモンなのか、フェロモンなのか、それとも人間に近い形での原初的な脳に該当する様々な生理システムがあるのだろうか？いずれにしても未来の時間が読める事は、過去の時間も認識出来る筈である。それ故、祖先を考える可能性がある。

仮にあるとするならば、自分の祖先に関しての情報も、遺伝子以外に何らかの形で持っている事になる。少なくとも生理学的に言えば、遺伝情報として、その与えられた環境での出来事への適応としての情報が残っている。しかし個々の個体として、その遺伝子情報の判断が、人間のように概念を用いて意識的に行われている訳でなく、群れとして適者生存の法則により、生と死を通して、その適応の記録が残されているに過ぎないとも言えるであろう。それは先祖という1つの区分が、個体の中でなされていない。即ち、時間区分に関し、過去、現在、未来のような人間の言葉に該当する物が無いという事である。

そこには、祖先への感謝の念とか、憧憬の念とかは存在せず、長い年月をかけての適者生存によって、その環境への適応の出来事が群れとして、あるいは種として保存されているのみなのであろう。

果たして、このように考えて良いのであろうか。正直なところ、この考えで私は十分に納得している訳ではない。しかし上記のように考えると、今の段階では個体としての動植物には自然崇拝や祖先崇拝の意識は無いと考える事にならざるを得ない。しているのは個体ではなく種という集団なのである。それも長年の遺伝を通してである。前述の如く、私には今のところ、残念ながらそれを正しく判断するだけの十分な科学的知識を持っていない。

（1）古代人に、祖先崇拝があったのか？

私は今日の宗教、特に神道を考える時、その二本柱の自然崇拝と祖先崇拝とが、いつ頃日本社会に誕生し、根付いたのかに強い関心を持っている。

人類がホモサピエンスになってから数万年以上経つが、少なくとも四大文明の中には、お墓があり、来世、あるいは後の世界を考えていた事は明らかである。世界中のどの地域のアニミズムの中に少なくとも、自然崇拝は存在していた。そして子孫が、そのお墓から祖先を意識した事も明らかである。ところで目を日本に向けると、縄文時代の初期には、自然崇拝はあっても祖先崇拝の考え方はまだ熟しておらず、水田稲作農業を始めた縄文後期の頃から、祖先崇拝の意識が現れ、それが社会生活の前面に出て、弥生時代に入ってそれが強まったのではないかと推察されている。果たしてそうなのか？

縄文時代中期頃からは、環状集落の中に、円心円の中心にお墓が造られているが、このお墓をどのような意味を持たせて造ったのであろうか？現代のお墓のように、祖先とのコミュニケーションを取る為の結界としての意味を付与されていたのであろうか？そこから祖先崇拝の意識を知る事が出来るかも知れない。縄文時代の人々は、宇宙そのものが1つの魂を持った生命体であり、人は死んだら、ミクロコスモスからマクロコスモスに戻ると考えていたので、ミクロコスモスの生活の場から離れる、即ち死を迎える事に対して殆ど恐怖心を抱かなかったと言われている。

とすると墓も、単に抜け殻の処理場であったとする考え方もあるだろう。確かに縄文前期考えるには、貝塚の中に他の廃棄物と一緒に死体が葬られていたという。今日のように、現世と来世との結界としてのお墓

自然崇拝と祖先崇拝は、いつ頃日本社会に誕生し、根付いたのか

といった意味をそこには与えていなかったし、祖先崇拝という考えには至らなかったと考えて良いのではないかと今のところ判断をしている。ある意味で「宇宙即我」であり、「過去→現在→未来」の流れが、「瞬間の連続が永遠」の如く「今」に集中していたのであろう。「瞬間の集合が永遠である」と捉えると、今が大事になるし、今に過去も未来も存在する事を考える事が出来るのだ。

しかしもう少し、その点を考えてみよう。仮に人間以外の動植物に祖先崇拝の意識があるならば、人間にも当初からその意識は備わっていたと考えるのが妥当であろう。それ故、縄文前期どころか、もっと以前からあったことになる。確かに、動物にも、ラクダの墓、ライオンの墓、ゾウの墓のようには存在していた。群として、あるいは個体として存在している。しかし、そこには儀式は見られない。

それでは縄文時代に墓場はあったが、そこで何らかの祖先崇拝の儀式を行っていたのだろうか？そうした儀式であれば明らかに何らかの意味で祖先崇拝の意識があった証拠となる。明らかに縄文中期以降は、そこに意味を持たされた形で祭祀がなされ始めている。

少なくとも他のごみ処理場と墓場とを分離していたという事は、何らかの区別の意識があったはずである。少なくとも死体を廃棄物のような物としてではなく、何か別の意味を持っていたと考え始めたと理解出来るだろう。しかし、その意識が祖先崇拝なのか、人間としてのより抽象的な形での墓の建造であったのか？それはもう少し研究、考察を続けねばならない。

少なくとも初期の縄文時代の人々の生活は、原始的狩猟と採集生活であり、タヌキ、猪、鹿、熊等を捕らえて肉として食べ、クリやドングリ、そして海や川、湖沼の魚類、特に貝類、それを採集する活動が主体であった。そうした状況の中で、自然との関りは密接であり、自然に自然の巨大さや神秘さや恐怖心や畏怖心を抱いた事は容易に想像できる事である。そうした中で自然崇拝は強まっていき、そこに何らかの口伝えの民話が生じ、それらが更に発展して、神話の原初的形態としての物語が芽生え始めていたのであろう。

ここでの結論は、縄文時代を一区分として、祖先崇拝の観点からは語らず、草創期、早期、初期、中期、後期、晩期と6区分し、中期以降に祖先崇拝は徐々に強まっていき、後期、晩期にはかなりの明瞭にあったと言えるだろうと捉える。

（2）水田稲作農業と祖先への感謝

次に祖先崇拝と密接な関係を持つ水田稲作農業を見ていこう。

当初の水田稲作農業は、おそらく人工的な整った水田ではなく、今日東南アジアの一部で、自然の中に出来た湿地帯の水溜りもどきの所で、何となく開始されたと考えるべきであろう。おそらく水溜りの中に、自然と稲が出来ていたのを見つけ、それを徐々に人工化していったのであろう。そうしたスタイルでは余り、祖先崇拝の感情は強くならないだろうと考えられる。

その昔は、縄文時代と弥生時代を

一緒にして石器時代と呼んでいたが、徐々に区別する考え方が強まり、それを画期的に進歩せしめたのが、静岡県の登呂遺跡であり、その遺跡に弥生時代の水田稲作農業を、そっくり再現している場所がある。弥生時代の前期の頃の水田は、水深が深く、丸太柵を用いて栽培を行っていたとそこには記されているし、実際にその姿を再現して見せている。今日の水田と全く初期に自然の水田との中間の形と理解出来るであろう。

人工的な水田を造るとすれば、人が田に入って仕事をする上で都合の良いようにする筈である。明らかにそんなに深い水田を造らない筈である。おそらく水田も時代と共に手が入れられ、今日のような一種の工場のような水田へと発展してきたのであろう。そこには莫大な祖先の努力が入っているのである。

そうであるとすると、より進化した水田を造るまでには、そして品種を造るには、何世代もの祖先達の努力が必要となる。

例えば、水田稲作が出来るようになるまでの努力を見てみよう。

今日のような水田稲作農業が出来上がる為には、日本の自然の特殊事情があり、次のような苦労と工夫が不可避であった。

①どうやって近くの川から水を引くか（堰）

②上流から下流に行くにつれて、水が配分されない可能性がある。（特に水量が少ない。干ばつの時）

③日本の河川は、水の多い時と少ない時の差が大きい（河川係数が大きいので、水量コントロールが難しい。これをどう配慮するか）

④日照りと長雨には、どう対応するか？（用水の造成）

⑤台風や洪水にどう対応するのか？（貯水ダムの建設）

⑥日本は山が国土の３分の２で、平地が少ない（段々畑や耕作地の小さい水田）

⑦稲の品種改良

⑧耕作用具の開発

⑨肥料の研究、開発と収穫方法

⑩保存方法の開発

⑪調理の開発

⑫ｅｔｃ．

こうした難しい困難な問題に実際に対応するには、ひと世代のみではなく、何世代もの長い間の開拓の不断の努力が不可欠であり、秋の五穀豊穣の為には、お天道様が微笑んでくれる事が不可欠であった、まさに「人事を尽くして天命を待つ」であり、これも日本人の精神の中で深く根付いている考え方である。

そうした諸問題を解決して、水田稲作農業が進んでいくには、何世代もの努力の継続があり、自らの祖先の苦労の結果として今日がある事になる。それは自ら祖先崇拝になるし、祖先を尊ぶことになる。粗末にしたり、無視したりすると、厳しい祟りが下されると考えていた。

自然崇拝と祖先崇拝とが共に、日本人の水田稲作農業主体の生活の中では、極めて重要な営みとなっていく。そうした状況の下に、水田稲作農業では、運命共同体としての村落の中で、日々のケの感謝の営みと共に、春の祈願祭や秋の収穫祭がハレの行事としてなされる事になっていったのであろう。

少なくとも『古事記』の中には、弥生式水田稲作農業が誕生するまでの経緯が、神生みの系譜として描かれている。明らかにそこには自然崇拝と祖先崇拝とが見られる。歴史学者は『古事記』のような神話の誕生する前に、昔の人々は、生活する上での多くの問題を教訓にし、それを『民話』として作り上げ、それを更に口伝えに伝えていったという。それが集約されて神話となり、更に体系化され、ひとつの宗教になっていくと分析した。「神道は宗教ではない」という考え方もあるが、「「宗」とは、元の元の教え、それを文書化したものが「教」である。その立場から神道は宗である」とする考え方もある。

それに対し狩猟生活においては、あるいは焼畑農業のように人為の余り入らない食料調達の方法で生活を成り立たしめていた民族には、祖先崇拝の意識は薄いと捉えられている。

（３）仏教との邂逅

そうした縄文時代からの自然崇拝と水田稲作農業の始まった頃からの祖先崇拝、そして弥生時代に入ってからの両者の社会的営みへの昇華と共に、ＡＤ３００年代に入って来た仏教は、こうした日本人の神道的な自然崇拝と祖先崇拝と自然に融合し

ていく。そして、聖徳太子の登場により公的に〝神仏の摺合〟がなされ、より洗練された形で自然崇拝と祖先崇拝とが形成され、それ以降の日本人の精神の基盤となった。

この辺りの事は、僧侶でもある小川敬史氏のネット上のサイトで巧みに対比的に纏められているので借用して、本論で掲載させていただく。

	神　道	仏　教
畏れる	亡くなったばかりの魂は稀に荒々しく、尊りをなす「死霊」となる	罪を背負ったまま亡くなった先祖様は、来世で苦しんでしまう このままでは災いが振りかかってくるかも知れない
祀る	魂は祭祀する事によって浄化される	御先祖様の罪を消す為に、供養をする
鎮まる	浄化された魂は「祖霊」となり、神に導かれて「神霊」となる	御先祖様は供養される事で、苦しみから解放される
恩恵を受ける	祖となったご先祖様は、我々に恩恵を下さる	苦しみから解放されて、ご先祖様は喜び、我々に恩恵を下さる

そこでも弥生時代の水田稲作農業の展開と共に、自然崇拝に加えて、祖先崇拝が強まっていったと記載されているが、本論の冒頭で私の疑問を呈したのは、「縄文人に祖先崇拝があったのか?」であり、その為に動植物の意志まで遡って触れたが、正直なところ、今の私の知識では、その答えへの道を歩んでいるまで、到着していない。それ故、疑問を残したままである。

話しを戻すが、この日本の自然崇拝と祖先崇拝と仏教の親和性を語ったが、明らかに仏教は、人間の知識という体系からは、日本の神道と比べて体系化されていると共に、「教」として万巻の書物となっており、人々や後世に伝えるのにはるかに便利で有効であった。

その為に聖徳太子は積極的に仏教を導入し、神道と摺合し、国体をしっかりさせると共に、国政を強化していったのであった。

仏教が神道と比べて、その価値が認められたのは、ひとりひとりの人間の業や罪や罰に触れると共に、どうやって心の安寧を得るかの方法論を人々に提示している事でもあった。もち論、神道においても、それに近いものはあったが、仏教程体系化し、格式化してはいなかったのであった。

しかし、いずれにしても神道にも仏教を受け入れる下地が十分にあった事を理解しておくことが大事である。

洗練された自然崇拝と祖先崇拝が形成され日本人の精神の基盤となった

（4）日本人の自然崇拝と祖先崇拝の形

水田稲作農業の更なる展開により、群れ→集落→村落→街→都市と人口の増加と共に、生活空間も拡大していった。それと共に、自然崇拝と祖先崇拝の形が次第にプライベートからパブリックの姿、形を整えていったようだ。それを少し見てみよう。

私の生まれた家には、神棚があり、毎朝父親が朝神饌として、小さな器にご飯とみそ汁を入れて捧げ、朝の挨拶をして、それから朝食が始まり、1日が始まるという感じであった。

おそらく弥生時代の人々も似たような営みによって祖先を日々の生活の中で奉っていたのではないだろうか?但し現代のような立派な神棚ではなく、極めて自然の形のままの器物を家族の近くの高い場所に置き、祀ったのであろう。

さて、自然崇拝に関しては、縄文時代から見られることは、縄文時代の人々が全ての存在を同等と見做し、「円」の関係であり、そこに精霊としての存在価値を見出し、全ての共生の考えを抱いた。そこでは明らかに自然崇拝があったと言えるであろう。

しかし縄文時代の祖先崇拝に関しては、前述の如く年代と共に変化をし、1万5000年前くらいから始まった初期縄文時代においては、まだ明確な祖先崇拝は無く、徐々に群れから集落を形成するようになり、今日既に発掘され、かなり解明されている中期（前5000年頃から）以降の縄文時代においては、その墓の作り方から判断して、かなり祖先崇拝が祖霊信仰として始まっていたと考えられると述べた。そして弥生時代の前期の頃から、水田稲作が本格的になり、社会構築もかなりのレベルに至っており、その頃になるとかなりのレベルの祖先崇拝が始まっていたようだ。

そして弥生時代になると、水田稲作農業が活発になると共に、運命共同体としての里山の村落での定住生活を強めるに従って、祖先崇拝は強まっていった。そこに家父長制をベースとした孔子の儒教が加わる事によって、日本社会での祖先崇拝は必須のシステムとなっていった。と同時に水田稲作農業の発達は、人口増と生活空間の都市化を進め、更に人間を他の自然と違った存在と認め、人間の間にも能力の差を認め、身分制度が徐々に形成されていった。諸々のモノやシステムが階層や階級に分化させられ、次第にその形を強めていったのであった。自然崇拝も祖先崇拝も同様であった。

（5）自然崇拝と祖先崇拝のこれからの地球上での大切さ

（4）までで自然崇拝と祖先崇拝の誕生と、その背景を見てきた。

私はこれからの地球上での人類の生存にとって、日本人の築き上げてきた自然崇拝と祖先崇拝（祖霊崇拝）とが、極めて重要な役割を果たすものと考えている。しかし残念な事に明らかに文明の発展と逆比例して、それらは薄まっている。

日本においても、ヨーロッパ近代科学技術文明が明治維新に導入されてから、日本人はその文明に酔いしれ、明治の末頃からは、自然崇拝も祖先崇拝の念も徐々に薄れてしまい、今日では祖先に対しての崇拝の念を抱いて何らかの対応している若者は、ある調査では4分の1以下になってしまっているという。そして墓離れが生じ、葬儀そのものが簡略化している。

元々ヨーロッパ文明文化においては「自然は悪魔の棲み家であり、悪の根源である」との思想を近代から現代近くまで、古代から延々と有していて、いかに自然を克服するかの立場で、文明文化を築いてきたと言えるだろう。それは一部の詩人や芸術家の一部の自然への讃美はあったものの、自然全体を好ましいモノとして捉える考え方は、庶民の生活の日々の中に入っていたものではなかった。その考えの下では、自然の中に聳え立つ建築物が、人間としての素晴らしい行為であり、自然を克服した象徴でもあった。そして自らの中に一神教を定立し、それとの関係で自らの主体性を決め、社会は契約関係で成立する物であったし、今もそうである。明らかに、そこには一部はあったとしても、自然崇拝の考えは殆ど無かったに等しい。

と同時に自然崇拝が弱かったヨーロッパにおける祖先崇拝は、崇拝というよりも、ファミリーの権威付けの為のものであり、更に言うならばお墓が個々人のものであるように、ひとりひとりの存在の確証であり、その権威付けであって、日本のような祖先崇拝では無いのである。

何故、ヨーロッパは祖先崇拝が弱かったのか?それは石造りの都市は、長年の住民の努力の結晶であり、その意味では先祖への感謝があって当然なのであるが、逆に石造りであり、長期間使用に耐えるので、1つの民族で先祖代々所有していたものでもないし、多くの戦いの間に民族としての所有者も変わっていくのであった。それは、勝利者の所有物に

代わっていくのである。

ヨーロッパの多くの有名寺院、例えばイタリアのサンマルコ寺院、スペインのセビリアのカテドラル、アルハンブラ宮殿等々、元々は、イスラム教やその建築物であり、キリスト教が造ったものではなかったが、キリスト教の進出により、所有者が変わると共に、一切の内装に手が入れられ、変造されたものなのである。そこには建築物に祖先の魂を入れる事は難しいのであろう。

加えて農業も氷河期に破れ、平地になった貧しい土地での畑作の為に、水田稲作農業と違って、かなり自然のままであり、先祖から所有はしてはいたものの、先祖の血や汗の流れた畑というイメージは弱い。むしろ三圃式のように、畑を「春用　冬用　休耕」の3つに分け、連作による病害を避けるといった、自然の利用以上のものとして高度に祖先の努力が入ったものとは言えないのである。

祖先の名誉と誉は固持するが、それは先祖に感謝するとしてもその努力というよりも、そこの所有と維持と名誉に対してであり、深く感謝するというものではなかった。ところが日本の水田稲作農業は、日本の自然の厳しさもあり、感謝するに余り有るものであった。

従って、祖先崇拝において、その崇拝の質と量とが彼我において大きな違いがあり、我々日本人の方が、アニミズムの時代を除いてはるかに自然崇拝と結びついていた祖先崇拝があったのである。

さてここからが本節の主題である

人間が自然から離れ下手をすると自らの生存環境を
棲めなくなるほどに壊してしまった

が、今日の地球上での人類社会の抱えている大問題は、何よりも環境問題であり、これ以上の物質、エネルギーの消費の限界が訪れている問題であろう。そこでは明らかに人間の意識として自然とのコミュニケーションを取り、どのように共生を図るかが最重要事項である。我々の祖先は、人類の文明を今日の段階まで展開する努力をしてきたが、大きな問題も同時に残してしまった。極端な事を言えば、農業の開始が環境破壊の始まりでもあったのだ。

そうした事態に対し、我々は祖先に感謝すると共に、何が今日の問題を生み出したのか、そこには先祖達の考え方に何が不足していたのかを明らかにして修正していかねばならない。ひょっとすると、ギリシャ神話の内容がキリスト教を支配し、全ての自然を神の下に置くように働いたのかも知れない。もう一度、そこを検証する事が現代に生きる我々の未来創造の鍵となるかも知れない。

一言で言えば、近代文明の展開と共に、人間が自然から離れ、人工化された文明世界に暮らすようになってしまった。その結果、自然との共生どころか、自然を略奪し、生態系を破壊し、異常気象を招き、下手をすると自らの生存環境を棲めなくなるほどに壊してしまった。

そうした状況において、地球上全ての人々や国々が、自然崇拝と祖先崇拝とを持ち、自然との共生を試みてきた日本の歴史に注目するようになり、1万5000年も続いた縄文時代にも、その視線が集中し出しているのである。

こうした時代を迎えて、日本は今一度自らが昔の日本を思い出し、自然崇拝と祖先崇拝を取り戻し、世界の人々にその姿を見せる事が望まれるのである。

何故世界中が、縄文時代に熱い視線を浴びせるかを、次の稿で詳しく考察をしていきたい。

（次号へ続く）